

VIII. 史的唯物論とは何か (1)

VIII-1 マルクス主義の近代

○ 近代とは？

近代とは弁証法（対話 dialectic）の時代である。神や王、天皇や将軍に代わってあらわれたジンテーゼの位置を占める《人間》からなる国家（すなわち国民国家 Nation-State）とは、どのような存在か。ブルジョワジーからなるのか、それとも労働者^{プロレタリアート}からなるのか。あるいは、それらの対立こそ、国民国家の主体というべきだろうか。近代は、資本主義なるテーゼを生み出し、またそれに対抗／補完する社会主義なるアンチテーゼを生んだが、いまのところ、《共産主義》が実現する見込みはありそうもない。しかし、マルクス主義が地球規模で政治経済の領域を席卷し、相当な影響を世界に及ぼしたことはまちがいない（その意味では、前近代のキリスト教や仏教、イスラム教に匹敵するもの）。

○ マルクス主義の歴史としての20世紀

【1917年のロシア革命から1991年のソ連崩壊まで】……資本主義の勝利？

1848年、フランスの二月革命を皮切りに全欧に革命の機運が高まるなか、マルクスとエンゲルスによって掲げられた《共産党宣言 Manifest der Kommunistischen Partei》。以来、19世紀後半から20世紀全般にわたり、哲学や歴史、経済、社会国家の問題にいたるまで、マルクスの思想は広範な影響を世界に。知識層のみならず、民衆の社会風俗から国家の運営にいたるまで、この思想を無視して進むのは不可能であるような、そんな時代。

- 1989～91年の東欧民主化とソ連崩壊、近年の中国の国家資本主義化の趨勢のなか、マルクス主義にもとづく社会主義国家が歴史の舞台から去り、またその実態（とりわけスターリニズム）の悲惨さが明るみにでるにつれて、資本主義諸国に対するマルクス主義諸国家の敗北が、ひとつひとつに認識されるようになった。
- グローバリズム（世界資本主義）へ

But: アメリカ、西欧、日本など資本主義陣営の勝利は、バラ色の未来を実現するより、経済的な疲弊と、歴史観の喪失からくる世界的な混迷を深めている。また、社会主義のタガを失ったアメリカは、経済不安のなか、かつてのような帝国主義やブロック経済化を強める傾向にある。日本でも経済格差の拡大や労働条件の悪化など、社会主義諸国との競争の中とりいれられてきた政策の減退が、ひとつひとつのあいだに閉塞感を強めさせている。

- 社会主義圏・資本主義圏（搾取する層）・第三世界（搾取される層）とで安定した構造をもっていた冷戦期の崩壊。世界の政治的不安定さが増し、現在は第三世界が先進諸国や後進国とされてきた国家の内部に入り込み、国家単位ではない、民族的な紛争が頻発している状態。
- ソ連圏の消失とともに、ソ連圏あるいはマルクス主義との対応関係のなかで生まれたケインズ主義や福祉国家のような理念が縮小。市場にすべてを委ねる新自由主義的かつ帝国主義的な政治が横行、「裸の資本主義」があらわれて、世界の各地にさまざまな格差を作り出している。

Cf. アメリカにおけるリベラリズム、リバタリアニズム、コミュニタリアニズムなどの政治思想

VIII-2 科学としての《歴史観》

○ 近代における知識人とは？

知識人は、世間（社会）と遊離した高尚な観念を大学でひたすら追究しているのではない。同時代の社会状況の要請にしたがい、自らの思考を練りあげ、概念を作りあげ、それを社会に還元していく存在。たとえばアインシュタインや湯川秀樹のような物理学者も、世界連邦建設同盟などをつうじて、社会運動と密接にかかわっていた。こうした流れを決定的にしたのが、マルクスといえる。

Ex.)

カント：啓蒙的知識人（キリスト教道德の弱まる混沌の時代、ニュートン物理学を哲学に組み込みつつ道徳論を展開）

ヘーゲル：進歩的知識人（フランス革命とその余波という激動のなかでゆるぎない《学知》そのものの在り方を追究）

マルクス：進歩的／批判的知識人（資本主義に組み込まれることで生じる民衆の貧困のなか実践的哲学を練りあげる）

- プロレタリアートのみならず、女性、民族的マイノリティや同性愛者など、多数派に抵抗するための理論的参照項として、（なぜ多数派が形成されるのかについての、歴史的＝科学的な理論を与える）マルクス主義の理論は、少なからぬ影響を与えた。

But: しかし、日本では1980年代のバブルの時代からソ連崩壊以降、知識人のそうした活動は影を潜めている部分もあり、また社会的に忌避されることも多い。

○ 歴史観の形成

マルクス以後、歴史像は、たんなる人類の自己認識（カント）でも、世界精神の自己実現（ヘーゲル）でもなくなった。現実の諸問題をよりよく変えようとする実践そのものが、歴史であると同時に歴史像であるような、歴史と人類の行為とが密接に結びついた、一種の実践的・科学的な歴史が生まれる。

- 歴史家や読者の主観による教訓めいた物語ではなく、科学として歴史を対象化。人間社会を「唯物論」的によってみることで可能となる。

Cf. エンゲルス「マルクス追悼演説」（むろん単なる社会進化論ではないが、当時はそのように受けとられた。）

「ダーウィンが生物の生命の進化の法則を発見したのと同様に、マルクスは人間の歴史の進化の法則を発見した。」

【唯物史観／階級闘争史観】

主観および主観を否定する不可知の《もの》を巻き込みながら進展するヘーゲル弁証法を逆立。精神も含めた人間の歴史的なあり方を、たんなる主観的認識の束ではなく、普遍的な科学として捉えようとする態度、それが唯物論 Materialismus（たんに《もの》だけがある、というような単純（An Sich）な見方ではない）。

- マルクスは同時代の経済を未来にわたって不変のものではなく、歴史的な段階として抽出、規程。それを「資本主義 Capitalism」と呼んだ。
- 歴史とは、さまざまな経済要因によって生み出される階級間の闘争の歴史。封建時代に推進される社会的分業を経て、近代に至って到達する資本主義的段階において、この闘争は極限状況を迎える。

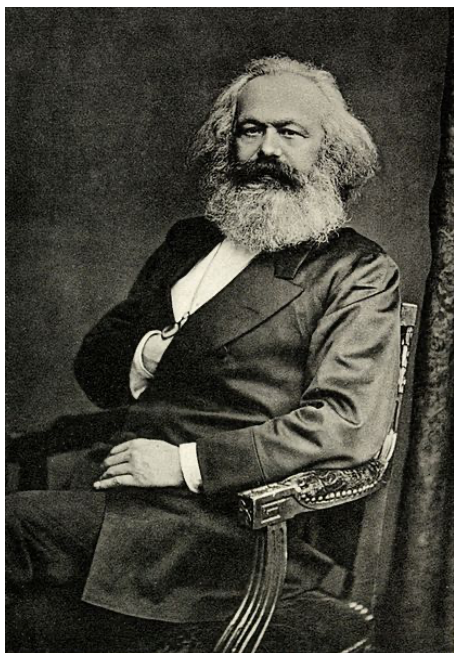
Cf. 歴史の「経済決定論」

上部構造（国家や制度、階級などの政治的水準 or 文化的イデオロギーの水準）⇔下部構造（経済・生産力、「土台」を形成）。下部構造が歴史の最終審級。以後、歴史の因果律は経済構造によって説明されることが多くなっていく。

- 社会現象を科学的にみる＝歴史的にみる、ということ。それを可能にするのが唯物論。

★ 《歴史観》は、人類の社会的実践の方向を指し示すアクチュアルなものとして、きわめて重要視されるようになる。

VIII-3 マルクスとマルクス主義



【歴史上のマルクス】

Karl Heinrich Marx (1818～1883)

1818年5月5日、ドイツ・ライン地方のトリアに生まれる。父は中流のユダヤ人弁護士で後にユダヤ教からキリスト教に改宗。ボン大学を経てベルリン大学に移り、ヘーゲル哲学を学ぶ。キリスト教批判を行っていたフォイエルバッハの影響のもと、急進的ヘーゲル左派（青年ヘーゲル派）に属す。反動化したプロイセン政府のもとで大学での学者としての道を絶たれ、1842年、ケルンの急進的ブルジョワ機関紙『ライン新聞』の主筆となる。1843年パリに住まいを移し、雑誌『独仏年誌』の刊行に携わる。エンゲルスと出会い、社会主義的傾向を強め、1847年に共産主義者同盟に参加、翌年エンゲルスとともに『共産党宣言』を執筆し、唯物史観を確立。パリの二月革命がドイツに飛び火した三月革命に際してはケルンで“Neue Rheinische Zeitung”を発行してドイツの革命運動の促進をはかったが挫折し、1849年ロンドンに亡命。1864年には国際労働者協会（第一インターナショナル）を組織。極度の貧困のなかで著作を続け、1867年マルク

ス経済学を代表する『資本論』Das Kapitalの第1巻を出版。1883年3月14日死去。64歳。

【主著】

『経済学哲学草稿』（1844）、『ドイツ・イデオロギー』（1845、エンゲルスと共著）、『哲学の貧困』（1847）、『共産党宣言』（1848、エンゲルスと共著）、『ルイ・ボナパルトのブリュメール八日』（1852）、『グルントリセ』（1853）、『経済学批判』（1859）、『資本論第一巻』（初版 1867.9、第二版 1872.9-75.11）、『資本論第二巻』（1885.6、エンゲルス編）、『資本論第三巻』（1894.12、エンゲルス編）、『剰余価値学説史』（カウツキー編）

○ マルクス主義の歴史

- エンゲルス……………マルクスの弁証法批判を「唯物弁証法」⇒「自然弁証法」&「史的弁証法」として体系化。『資本論』の第二巻・第三巻はマルクスの死後、エンゲルスによって編集され、刊行された。
- ベルンシュタイン……………修正主義／社会民主主義。議会で多数を占め漸進的改革を目指す。「社会主義のための諸前提と社会民主主義の任務」1899。
- カウツキー……………エンゲルスを受けつぐ正統的マルクス主義。経済主義／進歩主義。
- ヒルファーディング……………『金融資本論』1910。資本主義が新たな段階に移行。銀行資本により産業資本がコントロールされる状態。「組織された資本主義」をプロレタリアートのヘゲモニーに移行することを目指す。
- ローザ・ルクセンブルク…『資本蓄積論』1913。資本主義はその維持のためにかならず非資本主義圏を必要とする。そのため、必然的に資本主義国家は植民地分割戦争に突入する。最初の帝国主義批判のひとつ。
- レーニン……………『帝国主義論』1916。金融寡頭制のなか、独占資本主義が暴力的に世界を分割すると、後発国は植民地再分割戦争を起こさざるをえなくなる。「帝国主義戦争を内乱へ」。1917年、ロシア革命を成功させる。前衛党が上から指導する政治的イニシアティブの重要性を主張。ソ連の革命に対する自由主義諸国の干渉から一国社会主義的な立場をとらざるをえなくなる。
- トロツキー……………革命は世界革命でなければならない、という永久革命論。失脚し亡命先のメキシコで暗殺。
- スターリン……………国家社会主義から全体主義へ。マルクス主義に対する最大の幻滅の要因を作り出す。レーニン（マ

ッハ批判)の『唯物論と経験批判論』を聖典化。「弁証法的唯物論」を略した「DIA-MAT」がソ連の公式哲学となる。

ルカーチ・ジェルジ………1919年、ハンガリー革命に破れ亡命、『歴史と階級意識』1923。プロレタリアートが階級意識を持ち、革命を成し遂げることで主観と客観の分裂を乗り越え、もう一度全体性を獲得する道筋を示す。弁証法復興。

【社会主義者の国際組織】

第一インター (1864~72) →パリコミューン (1871) →第二インター (パリ: 1889~1914) →第三インター (コミンテルン、モスクワ: 1919~43)、社会主義インターナショナル (ロンドン: 1923~51、1951~) → 共産党宣言に「万国の労働者よ、団結せよ」とあるように、世界の労働者階級の統一的行動を求めて作られた社会組織。

労働組合を奨励、常備軍撤廃を主張、メーデーの創設、八時間労働制など。第二インターまで、戦時に昂揚する民族主義ナショナリズムとの葛藤にたえず揺れることとなる。第三インターはスターリンの大粛正により消滅。

VIII-4 知は学園のなかにとどまっていたはならない

史的唯物論のなかで、歴史はもっと実践的な姿を纏う。現在は史的唯物論のどの段階に位置しているか？

Cf. 『フォイエルバッハに関するテーゼ』1845

哲学者たちは世界を単にさまざまに解釈しただけである。問題なのは世界を変えることである。…

これまであったあらゆる唯物論 (それにはフォイエルバッハのものも含まれるのだが) の主要な欠点は、事物や現実や感性が客観あるいは観照という形式のもとでだけとらえられていて、人間的な感性的行動、すなわち実践として、主体的にはとらえられていないということである。

【進歩的知識人のあいだで読まれたマルクス】 (フォイエルバッハ的な疎外論のマルクスを重視)

ヘーゲルの批判的後継者 (エンゲルス)。文明の進歩は人類を必然的に共産主義へと導く (進歩史観)。帝国主義との対決 (レーニン以後、日本の多くの歴史学者)。疎外論 (ルカーチ・ジェルジ、サルトル、廣松渉、吉本隆明)。『経済学・哲学草稿』が重視される (マルクーゼ)。人間の顔をしたマルクス (三木清)。戦後の社会民主主義 (= 国民国家) のひとつの源流として、ベルンシュタインの修正主義。

【批判的知識人のあいだで読まれたマルクス】 (『ドイツ・イデオロギー』以降のマルクスを重視)

諸々の権力に対する《批判》の鋭さにおいて評価。ルイ・アルチュセール (『マルクスのために』) やニコス・プーランザス (『資本主義国家の構造』)、柄谷行人 (『トランスクリティーク』)。また、ポストマルクス (帝国主義) 的な議論として、ネグリ&ハート (『帝国』) やラクラウ&ムフ (『ポスト・マルクス主義と政治』) など。

【日本におけるマルクス主義の伝統】

戦前: アナ・ボル論争 → 日本共産党 (1922) → 『日本資本主義発達史講座』 (1932~33) → 小林多喜二虐殺 (1933)

労農派 (山川均・福本和夫) ⇔ 講座派 (野呂栄太郎・服部之総ら) 二段階革命論………明治維新をどう解釈するか？

戦後: 三池争議 (1959~60) → 安保闘争 (1960) → 大学紛争 (1968) → 浅間山荘事件 (1972)

1968年の世界的な革命の機運 (いわゆる五月革命) のなか、日本でも激しい社会運動が行なわれていた。

IX. 史的唯物論とは何か (2)

IX-1 歴史と実践

○ マルクスの社会概念

【社会をどのように考えるか】

① カントの場合

因果律は、現象の世界も含めた（超越論的）主観においてのみ成立する。実際の《物自体》が因果律に従っているかどうかは不可知。同様に、社会の有機性・組織性もまた、現象の世界を含めた主観においてしか成立していない。《物自体》にまで、社会性を認めることは、悟性によって厳しく戒められるべき。

Cf. 社会構成説

言語論的転回以後の社会構成説に親和的な立場。社会が対象として前もって存在しているのではなく、認識によって社会が構成されていると考える。

② ヘーゲルの場合

因果律は、自然の因果律と、個々の人間の論理性（理性）を含めた高次の精神により、歴史的プロセスを経て統一され、完成したものとなる。カントのいうところの主観的に認識された現象と、客観的な物自体とのあいだのズレこそ、有機的な組織性＝社会を実現する基盤となる。→主観と客観を含んだ高次の精神としての、《歴史》へ

Cf. 国家有機体説（社会有機体説）

カントのような素朴な生命＝有機体としての社会ではなく、主観的精神と客観的对象物とのズレを含むものとして有機体を思考。このズレは、高次の《精神》により、歴史的過程を経て統一され、有機体を実現している。

③ マルクスの場合

たとえば社会の有機性を実現していると考えられるブルジョワ階級と労働者階級とのあいだのズレ＝格差は、弁証法的に統一され、歴史のなかで国家を形成するといったところで、意味があるだろうか？ 現に貧困で苦しむ民衆にとって、そんな講壇哲学は役に立たない。

- 有機体＝社会は現実において形成されねばならず、歴史観もまた精神世界を含む現実において形成されねばならない。歴史観とは、精神ではなく、ひとつの現実である。
- マルクス主義のポイントは、ひとびとの認識というあやふやなものに作用する、観念的な思想ではなく、確たる現実のなかでどういう効果を生むか、という点でたえず審判を受けた実践的思想だったということ。
- 自己認識と客観的对象のたえざるズレを、たんに主観的な精神に回収するのではなく、むしろズレそのものを社会的・現実的な課題として、知識人が請け負うこと。＝（弁証法的）唯物論 Dialectical Materialism。

IX-2 史的唯物論の形成

歴史は、哲学者の理念や道徳でも、弁証法的に統一された国民の精神でもない。現実的な生産関係の変化のなかで、具体的に形作られていくもの。社会の発展を科学的に考察する契機を与えるもの。

Cf. 『経済学批判』序言（1859、唯物史観を定式化したものといわれる）

人間は、その生活の社会的生産において、一定の、必然的な、かれらの意思から独立した諸関係を、つまりかれらの物質的生産諸力の一定の発生段階に対応する生産諸関係を、とりむすぶ。この生産諸関係の総体は社会の経済的機構を形づくっており、これが現実の土台となって、そのうえに、法律的、政治的上部構造がそびえたち、また、一定の社会的意識諸形態は、この現実の土台に対応している。物質的生活の生産様式は、社会的、政治的、精神的生活諸過程一般を制約する。人間の意識がその存在を規定するのではなくて、逆に、人間の社会的存在がその意識を規定するのである。

社会の物質的生産諸力は、その発展がある段階にたつと、いままでそれがそのなかで動いてきた既存の生産諸関係、あるいはその法的表現にすぎない所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏へと一変する。このとき社会革命の時期がはじまるのである。経済的基礎の変化につれて、巨大な上部構造全体が、徐々にせよ急激にせよ、くつがえる。

このような諸変革を考察するさいには、経済的な生産諸条件におこった物質的な、自然科学的な正確さで確認できる変革と、人間がこの衝突を意識し、それと決戦する場となる法律、政治、宗教、芸術、または哲学の諸形態、つづめていえばイデオロギーの諸形態とを常に区別しなければならない。ある個人を判断するのに、かれが自分自身をどう考えているのかということにはたよれないと同様、このような変革の時期を、その時代の意識から判断することはできないのであって、むしろ、この意識を、物質的生活の諸矛盾、社会的生産諸力と社会的生産諸関係とのあいだに現存する衝突から説明しなければならないのである。

一つの社会構成は、すべての生産諸力がある中ではもう発展の余地がないほどに発展しないうちは崩壊することはけっしてなく、また新しいより高度な生産諸関係は、その物質的な存在諸条件が古い社会の胎内で孵化しおわるまでは、古いものにとつてかわることはけっしてない。だから人間が立ちむかうのはいつも自分が解決できる問題だけである、というのは、もしさらに、くわしく考察するならば、課題そのものは、その解決の物質的諸条件がすでに現存しているか、またはすくなくともそれができはじめているばあいにかぎって発生するものだ、ということがつねにわかるであろうから。

大ざっぱにいて経済的社会構成が進歩してゆく段階として、アジア的、古代的、封建的、および近代ブルジョア的生活様式をあげることができる。ブルジョア的生産諸関係は、社会的生産過程の敵対的な、といっても個人的な敵対の意味ではなく、諸個人の社会的生活諸条件から生じてくる敵対という意味での敵対的な、形態の最後のものである。しかし、ブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対関係の解決のための物質的諸条件をもつくりだす。だからこの社会構成をもって、人間社会の歴史はおわりをつけるのである。

- 生産関係の変化は、古い生産関係とのあいだの矛盾となる。主体と客体、表象と実在のズレ＝矛盾を主観的に回収するのではなく、社会において見出す。この矛盾の解消を求めて、《階級闘争》が繰り広げられる。これが歴史を動かす原動力となる。
- 土台（下部構造、生産活動）が上部構造（国家的な制度やイデオロギー）を決定する＝**経済決定論**。人間の主観的活動を中心とするのではなく、経済という人間の社会的活動を中心にした科学的な見方。
- 封建的生活様式は、ブルジョワ革命を経てブルジョワ的生活様式へ。ブルジョワ的生活様式を可能にする資本主義は、社会主義革命を経て**共産主義**へ。上記のズレはここにおいてはじめて歴史的に統一される。

Cf. 共産主義とは？（『資本論』第1巻、第2版）

共同の生産手段で労働し自分たちのたくさんの個人的労働力を自分で意識して一つの社会的労働力として支出する自由な人々の結合体（Assoziation）…。

- マルクスが切り拓いたのは、過去の社会および未来の社会を見通す歴史観そのものが、人間の実践的なあ

り方と密接に関わっているような、そんなアクチュアルなものの方の見方。マルクスの哲学においては、人類の歴史と個々人の現実の生活とが、かぎりなく接近している。

IX-3 マルクスの哲学 1 唯物論的弁証法

○ 『資本論』 Das Kapital に込められた意味

近代の経済を、資本主義 Capitalism と名づける。資本を増殖させるという目的以外の一切を黙殺する近代経済への痛烈な批判と警鐘。こうした経済段階に突入して以後、ひとびとの生は、価値増殖 (= 剰余価値 Surplus Value) を実現する際限のない過程に巻き込まれることになる。

【ヘーゲル弁証法とは？】 ……保守的国家主義者としてのヘーゲル右派と、革新的進歩主義者としてのヘーゲル左派

(1) 政府 (2) 市民社会 (3) 国家

ヘーゲル弁証法によれば、概念の運動は意識を通してのみ行なわれる。その媒介性のゆえに生じるズレ (疎外) はより高次の意識である精神によって回収され、同一性 = 絶対知 (das absolute Wissen) へと至る。

マルクスの批判 ① ……『資本論』第1巻 第1章

してみると人間たちがそれぞれの労働生産物をたがいに価値として関係づけるのは、これらの物が彼らにとって同種の人間労働のたんなる物的な覆いとして通用するからではない。そうではなくて、反対に彼らがそれぞれの異なる種類の生産物を交換のなかでたがいに価値として等置することによって、彼らは自分たちの異なる労働をたがいに人間労働として等置するのである。彼らはそのことを知らないが、彼らは実際にそのように行動している。

→ 個人的行為と社会的行為の総合不可能なズレとして表現されている。

マルクスの批判 ② ……『ドイツ・イデオロギー』

意識ははじめから「純粋な」意識としてあるのではない。「精神」は物質に「憑かれて」いるという呪いをもともとのおわさされておき、このばあいに物質は振動する空気層すなわち音響の、つまり言語の形であられる。言語は意識と同じ様に古い——言語は実践的な意識、他の人間にとっても存在し、したがってまた私自身にとってもはじめて存在する現実的な意識である。そして、言語は意識とおなじように、他の人間との交通の欲望、その必要からはじめて発生する。

→ 意識はすでに言語によって社会化されている。絶対知が実現するのはついに国家であり個人ではない。

マルクスの弁証法 ……『資本論』第2版序文

私の弁証法的方法は、その根本からしてヘーゲル弁証法と異なっているだけではない。それは正反対のものである。ヘーゲルは思惟過程こそが現実的なもののデミウルゴス (造物主) であり、現実的なものは思惟過程の外的現象にすぎない。私においては逆に、理念的なるものは人間の頭のなかに転移され、翻訳された物質的なものにほかならない。

ヘーゲル弁証法の神秘的側面を私が批判したのは、まだそれが一世を風靡していた三〇年近くも前のことである。しかし私が『資本論』の第一巻を執筆していたちょうどそのころ、目下教養あふれるドイツで大口をたたいている不快かつ傲慢、凡庸なるエピゴーネンたちはヘーゲルを「死せる犬」と呼んで悦に入っていた。ちょうどレッシングの時代に勇ましいモーゼス・メンデルスゾーンがスピノザをあしらったのと同じやり口である。それゆえ私は公然とかの偉大な思想家の弟子であることを宣言し、価値理論について論じた章の各所で、ヘーゲルに敬意を表すべく彼特有の表現方法を用いさえた。ヘーゲルの手中でたしかに弁証法は神秘化をこうむった。しかし、弁証法の一般的運動形態をはじめて包括的かつ意識的な仕方でも叙述したヘーゲルの功績が、それによ

てわずかでも傷つくことはない。ヘーゲルにあつては弁証法が逆立ちしている。神秘的外皮のなかに合理的中核を発見するには、それを倒立させなければならない。

Cf. 『フォイエルバッハに関するテーゼ』

古い唯物論の立脚点は市民社会であり、新しい唯物論の立脚点は人間の社会あるいは社会化された人類なのである。

(1) 社会化された人類 (2) 支配的階級の権力 (3) 社会化された人類のアソシエーション

X. 史的唯物論とは何か (3)

X-1 マルクスの哲学2 剰余価値

○ 剰余価値論——いかにして剰余価値は実現されるのか？

① 商品 (使用価値の絶対性と価値の相対性)

「商品なるものは、一見したところ、あたりまえのありふれた物であるが、商品进行分析してみると、それは形而上学的な精妙さと神学的な気むずかしさにみちた、きわめてやっかいな物であることがわかる。いま私が、商品はその属性によって人間の欲望をみたすとか、商品は人間労働の生産物としてはじめてこの属性を受けるといった観点で商品进行考察してみても、使用価値であるかぎりでは商品には神秘的なところはまったくない。…しかし、机が商品として登場するやいなや、机は感覺的にして超感覺的な物に変容する。机は、自分の足で床の上に立っているだけでなく、他のすべての商品にたいして頭で立ち、机がひとりでに踊り始めるときよりもずっと奇怪な妄想をくりひろげるのである。」(109)

→ **使用価値**：有用性に基づく質的規定。商品の自然身体（財）。それぞれがもつ個性（異質さ）は、交換に際して捨象される。有用労働によって生み出される。

「人間生活にとって一つの物が有用であるとき、その物は使用価値になる。しかしこの有用性は空中に漂っているわけではない。有用性は商品の身体的特性によって生じるのだから、この身体なしには存在しえない。」(56)

→ **交換価値**：交換の際に抽出された同一性（単位：抽象的人間労働、または貨幣）にもとづく量的規定。他の商品との関係性（差異）にもとづいて相対的に価値が決まる。抽象的人間労働によって生み出される。

「われわれが考察する社会形態では、使用価値は同時にまた、もう一つの別のものの素材的な担い手になっている。それがすなわち交換価値である。交換価値は、まずは量的比率として登場する。量的比率とは、一つの種類の使用価値が他種類の使用価値と交換される割合であり、その比率は時と場所に応じてたえず変化する。…商品身体の使用価値を捨象するならば、そこにはわずかに労働生産物というひとつの属性しか残らない。」(57-60)

「使用価値または財は、抽象的に人間的な労働がそのなかに対象化されている、あるいは受肉しているからこそ価値をもつ。」(61)

【交換価値／使用価値に分かれた商品】……矛盾する概念が商品において同居＝弁証法を展開

それぞれ質的に異なる使用価値をもった生産物が商品として交換されるということは、同時に、質的差異を捨象し、一定の比率によって比較可能な要素に抽象化された価値（＝交換価値）が共存していなければならない。

「商品は、それらが価値の姿をとるときには、それらの生まれたままの使用価値や、商品を生ませた特殊な有用労働の痕跡を、ことごとく脱ぎ捨てて、あたかもサナギのように、無差別の人間労働の一般的な社会的受肉へと自分を変容させる。」(165)

Cf. 精神／肉体に分かたれた人間（カント的近代人……超越論的・経験的二重体）

② 交換——不透過な行為（貨幣と流通）

「すべての商品は、その所持者にとっては非＝使用価値であり、その非＝所持者にとっては使用価値である。したがって商品たちはいたるところで持ち手を変えなくてはならない。この持ち手の交替こそが商品交換になる。だから商品たちは、自分を使用価値として実現できる前に、自分を価値として実現しなければならない。他方、商品は自分を価値として実現できる前に、自分が使用価値であることを実際に示さなくてはならない。…窮地に陥ったわれらの商品所持者たちは、ファウストのよ

うに考える——はじめに行為ありきと。」(130-132)

「交換の歴史的な拡大と深化は、商品の本性のなかにまどろんでいた使用価値と価値の対立を発展させる。この対立を交易のために明瞭に外部に見えるように表現しようとする欲望は、商品価値が自立した形態をとるまでに突き進み、商品と貨幣への商品の二重化によってこの自立的形態が決定的に得られるときによく、この欲望はしずまる。このように、労働生産物が商品に変容するのと同じ度合いで、商品は貨幣に変容する。」(133)

- 交換の過程で、商品は必ず価値を表示する貨幣形態を生む。（交換価値の表示機能をもつ）貨幣形態が、商品に内在する使用価値と交換価値の二重性という価値形態を隠蔽。「交換過程は、商品と貨幣への商品の二重化を生み出すが、これは使用価値と価値という商品に内在する対立が外部に表現された外的対立である。」(158)
- 商品の貨幣への変容、あるいは貨幣形態の実現が、流通（売りと買いの時空間的分離）を可能にし、流通は価値を資本（＝際限なく増殖しようとするもの）に変容させる。⇒ M-C-M'（資本の一般式）

But：商品交換はつねに等価交換であり、商品流通から剰余価値は生まれない。「等価値が交換されても剰余価値は生じず、等価値ではないものが交換されてもやはり剰余価値は生じない。流通や商品交換は何も価値を生み出さない。」(242) しかし、「商品生産者が流通圏の外側で他の商品所持者と接触することなしに価値を増殖したり、貨幣や商品を資本に変容させたりすることは不可能なのである。」(246)

【ここがロードスだ、ここで跳べ！】

「したがって資本は流通から発生することはない。しかし流通から発生しえないということもまた言えない。資本は流通のなかで発生するはずであると同時に、流通のなかで発生しないはずでもある。こうして二重の結果が生じる。貨幣の資本への変容は商品交換に内在する法則を基盤にしてはじめて展開しうるのであり、それゆえ等価物の交換がその出発点となる。まだ資本家のサナギとして存在しているにすぎないわれわれの貨幣所有者は商品をそのとおりの価値で買い、そのとおりの価値で売らねばならない。しかもこの過程の最後では最初に投じたよりも多くの価値を引き出さねばならない。サナギからチョウへの脱皮は流通圏のなかで生ずべきものであると同時に、流通圏のなかで生ずべきものともいえない。これらが問題の条件である。ここがロードスだ、さあ跳びたまえ！」(247)

③ 労働力——《人間》という商品

価値の交換はかならず等価交換。したがって、差異は使用価値からしか発生しない。

「貨幣所持者は流通圏内部すなわち市場において、その使用価値自体が価値の源泉となるような独特の性質をもつ商品を運よく発見する必要がある。…そして事実、貨幣所持者は市場でこのような特殊な商品を見出す——労働能力すなわち労働力がそれである。」(248)

※ 労働力が商品となるためには（労働の二重性——有用労働と労働力一般）：

- ① 労働者自身が自分の労働の自由な所有者でなければならない。（自己が自己の主人でなければならない＝近代性）
- ② 労働力の所持者は、自分の労働の成果ではなく、自分の生きた身体の中かに存在し、誰もがもっている労働力自体を商品として提供しなければならない。（抽象的な人間一般でなければならない＝近代性）
「一方に貨幣所持者あるいは商品所持者がおり、他方に自分の労働力しか所持していない者がいるという状態は、自然が作り出したものではない。この関係は自然史に基づく関係ではなく、またすべての歴史時代に共通する社会的関係でもない。それは明らかに過去の歴史的発展の結果である。」(251)

→ 価値の実体であったはずの労働力もまた商品だったのであり、労働価値説そのものが相対化される。

【ベンサム！】（資本家と労働者の出会い）

「労働力売買の外枠を規定している流通圏ないし商品交換圏は事実、天賦の人権にとって真の楽園である。ここで唯一幅をきかせているのは自由、平等、財産、そしてベンサムである。自由！ なぜなら、たとえば労働力といった一商品の買い手と売り手はみずからの自由意志にしか制約されないからである。彼らは自由な、そして法的に平等な人格として契約を結ぶ。契約はそこにおいて双方の意志に共通の法的表現が与えられる最終結果である。平等！ なぜなら彼らはともに商品所持者としてのみ相互に関係しあい、等価物同士を交換するからである。財産！ なぜならそれぞれが自分の持ち物についてのみ処分権をもっているからである。ベンサム！ なぜなら、双方いずれも自分のことにしかかかわらないからである。両者をむすびつけ一つの関係へともたらす唯一の力は、彼らの私欲の力、彼らの特殊利益、私的利益の力だけである。」(261)

- 労働力は、自分の（質的に異なる）使用価値を、（労働時間という量的な）価値として自らの意志で交換する。
- なおかつ、この使用価値は、価値（＝商品）を生み出す力をもつ。
- 労働者は、必ず一般的労働によって労働力の維持に支払われる最低賃金を超えた価値を実現する。

- ① 労働者の個々人の個性（使用価値）は、価値（価値体系 A）として等質化（一般化・抽象化・平均化）されて表現される。雇用契約成立！
- ② 生産過程で発揮されたさまざまな個性は、協業や分業によって平均化され、やはりそこで生み出された商品の価値に等質化されて表現される。商品 X 誕生。潜在的剰余価値発生！
- ③ 価値体系 A のなかに存在していた労働者＝消費者が、新たに生み出された異質な商品 X を購入することで、差額が生じる（出自資本）。剰余価値を実現！ この剰余価値は次第に均されて、商品 X を組み込んだ別の体系（価値体系 B）に移行する。以下繰り返し。
 - ②の生産過程には技術革新がともない、この流れはさらに加速する。
 - 生産過程と流過程、異なる価値体系の差異（潜在的な・ポテンシャルな体系と現存の体系の差異）が、剰余価値を生む。
 - 使用価値（個別的なもの）と交換価値（一般的なもの）の矛盾の弁証法的統一の過程として、批判的に資本主義の体系を考察することができる。